幼年教育研究年報　第25巻
The Annual Research on Early Childhood, 2003, **25**, 27-34

研究論文

対人葛藤場面における幼児の介入行動の変化
－問題解決方略との関連－

中川美和[1]・山崎晃[2]

The transition of children's interventions in an interpersonal conflict situation
－ The correlation between interventions and social problem solving strategies －

Miwa Nakagawa [1] and Akira Yamazaki [2]

To explore children's interventions in conflict situations, observations of six-year-old boys' playground behaviors had been obtained for seven months. Results indicated that children's interventions were different from teachers'. In addition, as compared interventions of the first period with ones of the second period, rates of occurrences of each intervention and the efficiency of each intervention had changed over time. The number of fair interventions increased and they had a high efficiency, on the other hand, the number of unfair interventions decreased and they had a low efficiency. In case study, those who showed fair interventions did not necessarily use fair social problem strategies, and vice versa.

Key Words: intervention, social problem strategy, conflict, children

対人葛藤は，幼児にとって様々な社会的関係を学習する機会を与える重要な役割を果たす。他者からの援助を得て，もしくは自力で対人葛藤を解決することを通して，幼児は他者の存在を認識し，また自分の意見を主張する方略を獲得していく。同様の見解が，幼児の対人葛藤についての多くの先行研究で得られている(e.g., Laursen, Finkelstein, & Betts, 2001; Shantz, 1987; Shantz & Shantz, 1985)。本研究では Shantz and Shantz (1985)にならい，対人葛藤を，「一方の子ども A が他方の子ども B に言語的，行動的に影響を与えるとき，B が抵抗を，A がその行動の維持を示すという，2 者間の明らかな対立状態」のこととして定義する。

多くの先行研究において，焦点を当てられているのは対人葛藤を引き起こした当事者である。しかし，幼児の対人葛藤は当事者同士によってのみ解決されるとは限らない。乳幼児を対象とした研究では，ものを取られた子どもに保育者が別のものを与えることによって対人葛藤が解決される事例(山本, 1986)や，保育者の提案によって，被害者と加害者間でものを共有することが可能になった事例(上野, 1974)が報告されている。特に乳幼児期においては，対人葛藤場面における保育者の介入率が高い(加用, 1981)。また，保育者と同様に，養育者も幼児に対して介入を行うことができる重要な他者であり(遠藤・吉川・三宮，1991)，3 歳から 5 歳までの幼児の養育者を対象にした質問紙調査による研究によれば，自分の子どもと他児との間に対人葛藤が生じ，自分の子どもが被害者である場合，その対人葛藤が過失的なものであれば，養育者は他児の行為が偶発的なものであるという説明を子どもに多く行う(入江・湯澤・倉盛，2000)。これらの研究結果は，幼児におけ

1　広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
2　教育学研究科附属幼年教育研究施設教授

る円滑な対人葛藤解決のためには，時として他者の介入が必要であることを示すものである。

しかし，介入を行うのは保育者だけであるとは限らない。年齢が上がるにつれて，幼児は仲間遊びを広く展開していき，仲間との相互作用の機会を多く得ることになる。その中で，対人葛藤を引き起こした他児に対して，幼児は，介入行動を示すようになっていく。その際，幼児の介入行動には，対人葛藤の当事者との関係や状況など，様々な要因が関連していることが予測される。しかしながら，幼児の介入行動について検討した研究はほとんどなく，したがって，幼児の介入行動にはどのようなものがあるのか，またそれが時間的な推移を経てどのように変化していくのかについては明らかにされていない。

子ども間のトラブルの生起頻度は，状況によって大きく変化していく(Shantz, 1987)。本郷・杉山・玉井(1991)は，トラブルの生起頻度が異なれば，それに対する介入者の行動にも変化が生じることを明らかにしている。しかしながら，乳児とは異なり，対人葛藤場面で介入行動を示すことができる高年齢児において，生じる対人葛藤の内容が縦断的に見て大きく変化するとは考え難い。だが，年齢が上がるにつれて共感性が高まり，高いレベルの他者視点取得が獲得されることによって，自分と他者との関係の捉え方，扱い方に変化が生じるならば，公平，不公平な介入行動の生起頻度には変化が生じることが予測される。同様に，介入行動を受ける対人葛藤当事者の側においても，その受け取り方に何らかの変化が見られることが予測される。そこで研究１では，本郷・杉山・玉井 (1991)による保育者による働きかけカテゴリー(Table1)を参考に，幼児の介入行動を分類し，時間的な推移を経て各介入行動の生起頻度にどのような違いが見られるか，また介入行動に対する対人葛藤当事者の反応にどのような変化が見られるかを明らかにする。

対人葛藤は，他者との関わり方を学び，社会性を身につける機会である(Shantz, 1987)。幼児の示す介入行動に時間の推移に伴う変化が見られるとすれば，それは様々な対人葛藤を体験する中で，幼児が何かを学習した結果であろう。つまり，対人葛藤場面で被害者，加害者の両者の立場に立つ経験を持つことによって，幼児は被害者の感情を理解することができ，また同時に加害者側の感情も理解することが可能になる。すなわち，幼児は対人葛藤の当事者の立場からどのような方略が円滑な対人葛藤解決に有効であるかを学び，その経験が，幼児が介入者として他児の対人葛藤に対して示す行動に反映されると考えられる。そこで，研究２では，幼児が対人葛藤場面において当事者の立場から示す問題解決方略と，第３者の立場から示す介入行動がどのように異なるかについて，事例を用いて検討する。

さて，対人葛藤を扱った研究の中では，男女差に焦点を当てたものが少なくない。女児に比べて男児の方が，挑発場面ではより興奮しやすく(Fabes, 1994)，そのため，遊び場面で問題行動を生じさせたり報復行動を多く示すのも女児に比べて男児の方が多い(Fabes, Shepard, Guthrie, & Martin, 1997; Fabes & Eisenberg, 1992)。男児の遊びには女児の遊びに比べて，仲間間の支配関係がより明確に表れており(Thorne, 1986)，このような男児のグループ内の支配関係や，身体接触の多さが，対人葛藤場面で見られる男女の行動差につながると考えられる。さらに，他児同士の対人葛藤に対して幼児が示す介入行動は，保育者や養育者によるものに比べて，公平さに欠けた行動を含んでいることが予測される。つまり，仲間との支配関係や親密性などの影響から，不公平であっても加害者の味方についたり，被害者を責める行動が見られると考えられる。女児に比べて男児の方が，仲間内の支配関係に左右されやすいことから，このような偏った介入行動は女児よりも

Table 1　保母の働きかけカテゴリー(本郷・杉山・玉井, 1991)

カテゴリー名	行動内容
制止・禁止・注意	言葉かけによるものと体を押さえるものが含まれる
取る	トラブルの対象となった物を子どもから取り戻すこと
与える	トラブルの対象となった物を子どもに与えること
所有の確認	最初の所有者を子どもに知らせること
行動・状態の説明	相手の子どもの行動や状態を陳述・説明すること
要求・気持ちの確認	子どもの要求や気持ちを尋ねること
要請の指示	「かしてくれる」よう相手の子どもにお願いさせること
解決策の提示	代替物の提示，順番，共有，別の遊びの提案，その他
その他	要請の代行，他の行動の指示など

Table 2　幼児が示した介入行動の種類

カテゴリー名	行動内容
制止・禁止・注意	加害者の行動を言葉や体を使って抑制する
行動・状態の説明	当事者のうち一方の気持ちをもう一方に伝える
加勢	当事者のうちどちらか一方の味方になって一方を責める
反復	当事者のうちどちらか一方の言葉を繰り返す
話をそらす	対人葛藤から当事者の注意をそらさせるために別の話題を提示する
煽り	どちらの味方につくわけでもなく当事者の興奮を高める
無視・無言	対人葛藤の生起に気づいているにもかかわらず何の反応も示さない

男児に多く見られることが予想される。また，介入行動には主に言語表現が用いられること，年齢が高い幼児ほど，対人葛藤場面で協調的志向を多く示す(渡部，1993)ことを考慮し，本研究における対象児は年長児男児とした。

研究 1

【方法】

対象児：H 市内 F 幼稚園に通う年長児男児 15 名。

観察時期：第 1 期；2002 年 4 月から 7 月。第 2 期；2002 年 10 月から 12 月。

観察手続き：対象児 1 人当たり 30 分間の観察を自由遊び時間内に行った。観察記録にはフィールドノートを用い，対人葛藤が発生した際に示した対象児の行動と，その行動に対する当事者の幼児の反応を記録した。

【結果】

1．介入行動の分類と各介入行動の生起率

本郷・杉山・玉井(1991)の保母の働きかけカテゴリー(Table1)を参考に，対象児が示した介入行動を 7 カテゴリーに分類し(Table2)，各介入行動の生起率をもとめた(Figure1)。その結果，「加勢」が 25 %と最も多く，ついで「無言」(23 %)，「制止」(18 %)，「行動・状態の説明」(15 %)が多かった。このことから，幼児の介入行動には，保育者が示すものとは異なるものがあり，介入行動の種類によって生起率が異なることが示された。

観察された介入行動は，公平さという見地から 2 つに分けることができる。すなわち，「制止」や「行動・状態の説明」，「話をそらす」は，被害者と加害者の両者の感情を理解していなくては行うことが難しく，比較的公平な立場から行われるものであるといえる。それに比べ，「加勢」，「煽り」，「反復」は，対人葛藤をおさめるためというよりはむしろ，力関係の強い他者との関係を強めるために行われることが多い。つまり，幼児は，力関係の強い他者に対して，どのような状況においても自分は味方であることを示すことによって，仲間内の自分の立場を確保している可能性がある。「加勢」などの介入行動は，このように，力関係に従って行われることが多い。以上のことから，幼児

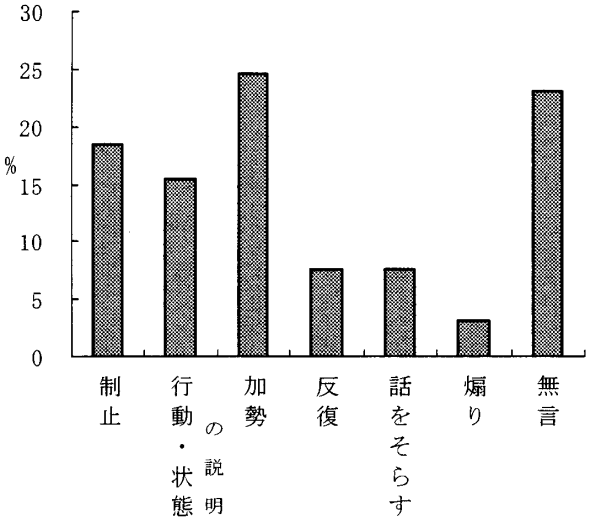

Figure 1　各介入行動の生起率

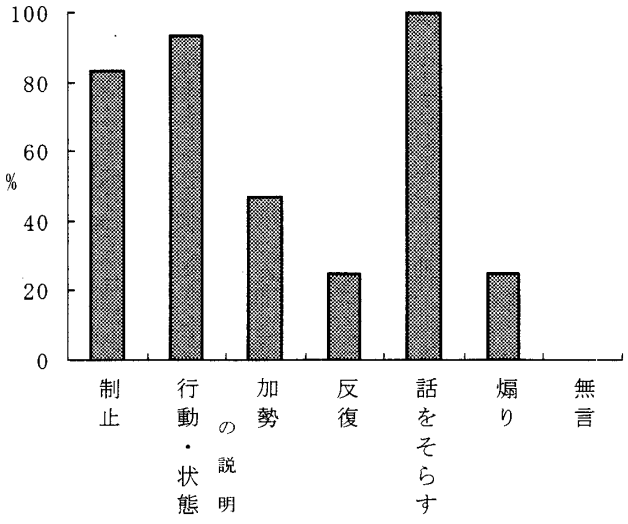

Figure 2　各介入行動に対して当事者が示す対人葛藤解決につながる反応の生起率

の介入行動のうち，「制止」，「行動・状態の説明」，「話をそらす」を公平な介入行動，「加勢」，「煽り」，「反復」を不公平な介入行動であるとした。

2．各介入行動に対して当事者が示す対人葛藤につながる反応生起率

続いて，各介入行動に対して当事者が示した反応のうち，対人葛藤解決に結びついたものについて，反応率をもとめた(Figure2)。その結果，生起率が低かった「話をそらす」の反応率は非常に高く(100 %)，同様に，生起率の高かった「制止」(84 %)，「行動・状態の説明」(94 %)の反応率も高いことが示された。しかし，生起率の高かった「加勢」の反応率は47 %と，それほど高くはなかった。このことから，幼児の介入行動は，生起率が高くとも，効率が低いものもあれば，生起率は低いにもかかわらず，高い効率を示すものもあることが示された。

3．幼児の用いる介入行動の生起率の推移

1年を大きく2期に分け，2002 年4月から7月を第1期，10 月から 12 月までを第2期として，2つの期間における介入行動を比較することで，幼児の介入行動が時間の経過に伴ってどのように変化するかを検討した。

第1期，第2期で，各介入行動生起数に違いが見られるかを検討したところ，観察時期による人数の偏りに有意傾向が見られた($\chi^2_{(5)} = 10.75, p < .1$)。残差分席の結果，第1期に比べ，第2期では「制止・禁止・注意」が多く，逆に，「行動・状態の説明」，「加勢」と「無視・無言」が少なかった。このことから，年長児では，時間を経るにつれて，仲間の葛藤を見て見ぬふりをする行動や，仲間内の力関係に左右される不公平な介入行動が減少することが示された。また，状況や当事者の気持ちを代弁する行動が減少し，強い口調で加害者を戒める制止行動が増加することから，時間経過に伴って，頻繁に用いられる公平な介入行動の種類も変化するといえる(Figure 3)。

4．各介入行動に対して当事者が示す対人葛藤解決につながる反応生起率の変化

各介入行動に対して，対人葛藤の当事者が示した反応のうち，対人葛藤解決に結びつく行動の生起率をFigure4 に示す。対人葛藤解決につながる当事者の反応生起率が 50 %を超えた介入行動は，「制止」と「行動・状態の説明」，そして「話をそらす」であった。「制止」(前期 100 %，後期 67 %)は，第1期に比べ第2期になると，反応率がやや低下するものの，高い効率の介入行動である。同様に，「行動・状態の説明」(前期 89 %，後期 100 %)，「話をそらす」(前期 100 %，後期 100 %)も，観察時期にかかわらず，依然効率の高い介入行動であった。一方，50 %以下の効率を示す「加勢」，「反復」，「煽り」は，不公平な立場から示される介入行動であるため，当事者による反応率は観察時期にかかわらず低いままであった。以上のことから，各介入行動に対して対人葛藤当事者が示す，葛藤解決に結びつく反応の生起率は，観察時期によって変化しないことが示された。つまり，時間経過に伴って，各介入行動の生起率は変化しても，各介入行動の効率は一定のままであり，公平な介入行動は受け入れられやすく，逆に不公平な介入行動は受け入れられ難いままであった。

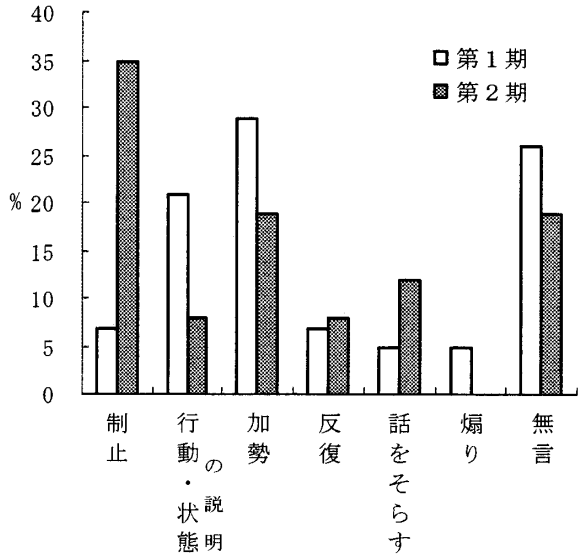

Figure 3　観察時期別に見た各介入行動の生起率

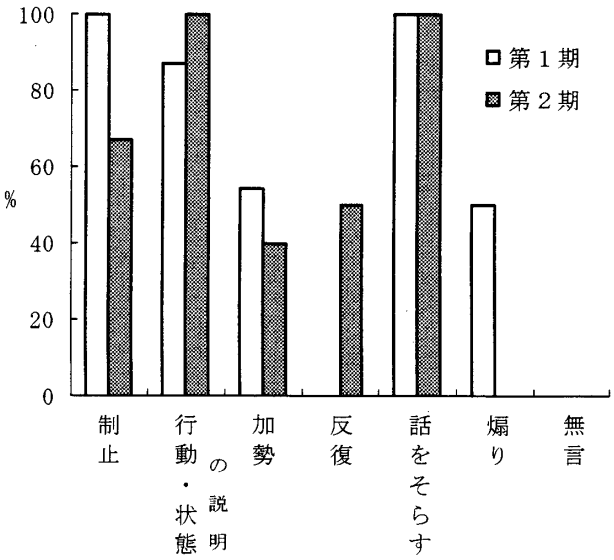

Figure 4　観察時期別に見た各介入行動に対して当事者が示す対人葛藤解決につながる反応の生起率

【考察】

研究１では，時間の経過に伴って，他児の対人葛藤に対して幼児が示す介入行動と，各介入行動に対する当事者の反応に変化が見られるかを検討した。

第１期に比べて第２期では，公平な立場から示される介入行動の中でも「制止」が多く，その効率も高いままであった。一方，「行動・状態の説明」は，同様に公平な介入行動であるにもかかわらず，効率は高いものの，行動生起率が低くなった。

本郷ら(1991)は，「制止・禁止・抑制」介入行動を，対人葛藤を短時間で終結させることができる行動であると捉えており，保育者は，時間経過に伴ってこの介入行動を乳児に示す頻度が低くなると報告している。逆に，相手の気持ちや意図に乳児を注目させる「行動・状態の説明」が増加するという。本郷ら(1991)の先行研究と逆の結果が得られた原因としては，仲間内の支配関係が時間経過とともに強化されたことが挙げられる。Thorne(1986)によると，男児の遊びには，仲間間の支配関係が顕著に表れる。中期において介入行動が多く見られたのは，サッカーやリレーなど，集団遊びの中での対人葛藤においてであった。このような集団遊びには，クラスの男児のほとんどが参加しており，遊びの進行とともに，リーダーを中心とした支配関係が明確化されていた。支配関係の強い男児は弱い男児に対して強い態度で接することが次第に多くなり，そのため介入行動としても，丁寧に状況や他者の感情を説明する「行動・状態の説明」よりも，コストが低くかつ効率の高い「制止」が多く見られるようになったのではないだろうか。また，仲間関係が築かれるこの時期，親密性が遊びに及ぼす効果は大きい(Doyle, Connolly, & Rivest, 1980)。親密性の高い相手だからこそ，あえて強い態度で介入を行った可能性も考えられる。この点については，今後更に検討していく必要がある。

一方，不公平な立場から示される「加勢」，「煽り」，「反復」，対人葛藤に関心を示さない「無言」は，行動生起率も効率も低かった。このことから，幼児は，不公平な介入行動は対人葛藤を解決に導くことが難しいと認識していることが示された。加勢や煽りなどの行動は，保育者や養育者には見られない，子ども特有の介入行動である。児童を対象とした研究では，いじめ場面に直面した場合，児童の４分の３が傍観や加勢の行動を示すことが明らかにされている(O'connell, Pepler, & Craig, 1999)。力関係の強い他者への加勢などの行動は，いじめを助長させる結果につながる。つまり，力関係に従って行われる不公平な介入行動は，対人葛藤終結につながりにくいだけでなく，むしろ被害者と加害者の関係を悪化させる。「加勢」や「煽り」などの不公平な介入行動が減少し，「制止」という公平な介入行動が増加するという本研究の結果は，幼児が対人葛藤を解決することを目的に介入行動を行うことを示しており，このような公平な介入行動が増加することによって，対人葛藤がいじめなどの悪質な状況に発展することを防ぐことができるといえる。

研究２

研究１において，幼児が示す７つの介入行動の生起率とその効率が，時間経過に伴って異なるかを検討した。しかし，幼児が示す介入行動の種類やその生起率は，必ずしも時間経過によってのみ変化するとは限らない。介入を行うには，対人葛藤の当事者の気持ちや状況を理解することが求められる。他者視点取得や社会的状況認知などの能力は，対人葛藤をその当事者の立場から解決する際においても求められるものであり，様々な対人葛藤場面で当事者の立場を経験することによって，幼児は被害者と加害者の双方の感情を理解することができる。その経験は，幼児が第３者の立場に立ったときに示す介入行動に反映されることが予測される。しかし，対人葛藤場面で，当事者の立場から幼児が示す解決行動と，第３者の立場から幼児が示す介入行動が一致するかについては確認されていない。そこで研究２では，事例を用いて，幼児の問題解決方略が介入行動と対応しているかを検討する。

【方法】

対象児：2002 年 4 月から 7 月，10 月から 12 月にかけての観察記録をもとに，公平な立場から介入行動を多く行う K 児と，不公平な立場から介入行動を多く行う M 児を対象児として抽出した。

観察時期：2002 年 12 月。

観察手続き：K 児，M 児が関わる対人葛藤と，K 児，M 児の周りで他児同士の対人葛藤が生起してから終結するまでを記録した。観察は自由遊び時間内に行い，観察記録にはフィールドノートを用いた。

【結果】

【事例１】K 児が関わる対人葛藤エピソード

年長児男児が園庭でサッカーをしている。
K児は自分の方に転がってきたボールを蹴らずに，
手で受け止めた。
それを見たI児はすかさず，
I児：「ハンド！」
とK児に注意をした。
しかし，K児はそれを認めず，
K児：「ハンドじゃないじゃん。」
と強い口調で言い返した。

そばにいたT児は，K児に賛同して，
T児：「ハンドじゃないだろ。」
とI児に言い，K児と一緒に再びサッカーを始めた。
K児とT児が去った後，納得のできないI児は，
Y児：「ハンドなのに。」
と，不満そうにつぶやいたが，それ以上は何も言わず，サッカーに再び加わった。

【事例2】M児が関わる対人葛藤エピソード

I児がR児の作った段ボールの汽車にぶつかり汽車を壊してしまった。
それを見たM児はR児を呼びに行き，
M児：「R，Iが壊した。」
とR児に訴えた。R児は怒ってI児を突き飛ばした。
I児は転んで側にあったとび箱に頭をぶつけ，涙を浮かべた。
M児は，I児がどうやってR児の汽車を壊したかを身振り手振りで再現しながらR児に説明している。M児はR児と一緒になってI児を激しく責めた。
M児はしばらくして，べそをかいているI児に気がついた。M児はI児に近寄り，
M児：「Iくん，さっきはごめんね。」
と，I児に話しかけた。しかし，I児はそれに対して何も答えない。M児は再び，
M児：「大丈夫？さっきはごめんね。」
とI児に話しかけた。しかし，I児は怒りがおさまらなかったらしく，跳び箱でぶつけた頭を押さえながら，何も言わず怒ったように場を去った。

【事例3】K児とM児による介入行動

年長児の男の子4人(M児，Y児，K児，I児)と女の子2人(S児，T児)がすごろくゲームをしている。
すごろくのマスには動物の絵と，その動物の行動が書かれてあり，ルールとして，サイコロを振って止まったコマに書かれている行動をしなければならない。
Y児の順番になった。Y児が止まったのはシロクマのコマで，「よちよち歩き」をするよう書かれてある。
しかし，Y児はみんなの前でよちよち歩きをすることが恥ずかしいらしく，黙ってうつむいてしまった。それを見たI児は，
I児：「よちよち歩きのとこなんじゃけん，よちよち歩きせんと！」
とY児に迫った。
それでもY児がよちよち歩きをしないのでI児はそばを通りかかった先生に
I児：「よちよち歩きのとこのにY児がよちよち歩きせん。」
と訴えた。
先生はI児の意見に賛成して，
先生：「せんと（すごろくゲームが）できんよね。」
とY児に話しかけた。それを聞いたI児は，
I児：「せんのー？」
とY児に詰め寄った。
同様に***M児も，***
M児：「せんのー？」
とY児に迫った。
Y児は2人に責められて泣き出してしまった。それを見たK児は，Y児の顔をのぞき込み，
K児：「恥ずかしいの？やりたくないの？」
と言葉をかけた。Y児が頷くのを見て，K児は，
K児：「やりたくないんだって。」
と，Y児の気持ちをI児とM児に伝えた。
I児は少し不満そうだったが，そのままゲームを続けることになった。

K児は，年長児男児の中でリーダー的な存在であり，遊びがK児中心に進行することも珍しくない。事例1にでてきたT児は，K児の言うことに逆らうことが少なく，例えK児が間違っていても，K児を援護する姿が多く観察されている。事例1では，K児はサッカー遊びの中で明らかにルール違反を犯しており，I児の主張が正当なものである。しかし，I児が反則を咎めたにもかかわらず，K児は自分の主張を強調した。状況を理解しているはずのT児がK児を弁護したことにより，K児の正当性が成立した形になり，最終的にI児もK児に抗議することを諦めてしまった。このように，K児は，自分が対人葛藤の当事者になった場合，正しい，間違っているにかかわらず，自分の主張を押し通す自己中心的な解決方略をとることが多い。

しかし，事例3では，困窮状態にあるY児に対して，K児は「行動・状態の説明」を行っており，介入者としては，公平な見地から介入行動を示している。特に第2期において，K児のこのような行動が多く観察されており，K児がグループの中心となってリーダーシップをとることが多いためか，周囲の幼児もK児の示す介入行動を受け入れる傾向にあった。

一方，M児は，仲間入りをしようとしても，遊びに加えてもらえないことが多く，遊びに参加しても，意見や主張が受け入れられることが少ない。そのため，他児の主張に賛同，同調することはあっても，自分の主張を述べることが少ない幼児である。しかし，M児

は対人葛藤の当事者の立場に立ったときは，事例２で示したように，相手の感情を理解した上で，対人葛藤問題を解決することができる。

反対に，第３者の立場から他児同士の葛藤にかかわる場合，事例３に示したように，M 児は他者の意見に同調し，場合によっては支配関係の強い他者に加勢するという不公平な介入行動を示すことが多く，「制止」，「状況・行動の説明」など，自分が何かを主張することによって，他児同士の葛藤を解決しようという試みは見られない。他者の意見に同調し，他者に隠れて攻撃的な主張を行うことによって，M 児は安全な自己の立場を確保しているようである。このように，M 児は対人葛藤の当事者の立場からは相手の感情を考慮し，両者が納得するような公平な見地から方略を用いることができるのにもかかわらず，第３者の立場から他児の葛藤に介入する際には，不公平な見地から介入行動を行うことが多い。

以上のことから，対人葛藤場面で当事者の立場から幼児が示す問題解決方略と，第３者の立場から示す介入行動は必ずしも一致しないことが示された。

【考察】

研究２では，幼児が対人葛藤場面で当事者の立場から示す解決方略と，第３者の立場から示す介入行動が一致しているかを検討した。その結果，両者の間には必ずしも一致が見られないことが示された。介入行動のように，第３者の立場から他児同士の葛藤に関わる場合，公正な解決方法が望まれる。渡辺(1989)によると，高いレベルの公正観を獲得するには，様々な人の主張や状況を理解できることが必要とされる。そのため，公平な介入行動を行うには，対人葛藤の状況や当事者である他児の気持ちを理解できることが必要とされる。研究１では，公平な立場から介入行動を行うことは幼児でも可能であることが示された。しかし，幼児が自己中心的な見地から物事を捉える傾向にある場合，自分が当事者となる対人葛藤場面において，自己中心的な見方が公正観を上回る可能性が考えられ，したがって解決行動に公正観が必ずしも反映されるとは限らないのではないだろうか。以上のことから，幼児は高いレベルの公正観を獲得し，介入者としては公平な立場をとることができても，自分が当事者となる対人葛藤場面では公平な立場をとることが困難であるといえる。このことが，K 児の事例における対人葛藤場面での問題解決方略と介入行動の違いの一因であると考えられる。

また，K 児とは逆に，M 児の事例から，対人葛藤当事者の立場からは相手の感情に配慮した上で解決方略を用いることができる幼児であっても，第３者の立場からは不公平な介入行動を行う可能性があることが示された。この原因の１つとしては，他者評価に対する懸念が挙げられる。対人葛藤場面において，自分が悪くないにもかかわらず，自分の意見よりも相手の意見を重んじ，自己を抑制した行動を示す幼児は，高いレベルの他者視点取得が確立されている一方で，自己主張能力が低い可能性が考えられる。他者の意見を気に懸けるあまり，自己弁護ができない幼児は，他児の葛藤に第３者の立場から関わる際にも，他者による評価を懸念するあまり，制止などの思い切った自己主張ができないのではなかろうか。つまり，他者評価に気を配るあまり，正当な意見を主張することができず，結果として，他者の意見に同調する「加勢」や「反復」行動が多くなった可能性が考えられる。

研究２では，幼児の問題解決方略は，介入行動と必ずしも一致していないこと示された。しかし，研究２で得られた結果からだけでは，対人葛藤場面での問題解決方略が介入行動と異なると断言することはできない。対人葛藤場面での問題解決方略と介入行動との関連を検討する上では，本研究で取り上げたタイプ以外の幼児にも焦点を当てる必要がある。また，親密性や支配関係など対人関係に関わる要因を取り入れた上で，介入行動について検討する必要がある。

【総合考察】

本研究の目的は，幼児の介入行動が時間の経過に伴ってどのような変化を示すのか，また，その介入行動には，対人葛藤場面における当事者の立場での経験が反映されているかを検討することであった。その結果，時間経過にしたがって幼児の介入行動には，不公平な介入行動よりも公平な介入行動が多く見られるようになることが示された。しかし，介入行動と問題解決方略の間には一致が見られなかった。

介入者が示す行動は，対人葛藤に大きな影響を与える。特に，幼児特有の介入行動である加勢は，いじめを強化するという負の効果を持っており（Schwarts, Dodge, & Coie, 1993），いじめ場面では児童の多くがこの行動に従事することが示されている(O'connell, Pepler, & Craig, 1999)。介入行動と問題解決方略が必ずしも一致しないという結果から，このような行動は，対人葛藤場面で他者の感情や意図に配慮した解決方略を用いることができる介入者でも示す可能性がある。いじめなどの悪質な状況に対人葛藤が発展することを回避するためにも，幼児の介入行動について広範的な見解を得る必要があり，そのためには，対人葛藤場面で当事者の立場から得た経験が，介入行動に反映されるかについて，さらに深く検討していく必要がある。

引用文献

Doyle, A., Connoly, J., & Rivest, L. 1980 The effect of playmate familiarity on the social interactions of young children. *Child Development*, **51**, 217-223.

遠藤由美・吉川佐紀子・三宮真智子　1991　親の叱りことばの表現に関する研究　**教育心理学研究**, **39**, 85-91.

Fabes, R. A. 1994 Physiological, emotional, and bahavioral correlates of gender segregation. In C. Leaper (Ed.), *The development of gender and relationships* (pp. 19-34). San Francisco: Jossey-Bass.

Fabes, R. A., & Eisenberg, N. 1992 Young children's emotional arousal and anger/aggressive behaviors. In A Fraczek & H. Zumkley (Eds.), *Socialization and aggression* (pp. 85-102). Berlin, Germany: Springer-Verlag.

Fabes, R. A., Shepard, S. A., Guthrie, I. K., & Martin, C. L. 1997 Roles of temperamental arousal and gender-segregated play in young children's social adjustment. *Developmental Psychology*, **33**, 693-702.

本郷一夫・杉山弘子・玉井真理子　1991　子ども間のトラブルに対する保母の働きかけの効果－保育所における１～２歳児の物をめぐるトラブルについて－　**発達心理学研究**, **1**, 107-115.

入江慶太・湯澤美紀・倉盛美穂子　2000　対人葛藤場面ならびに他者困窮場面における養育者の言語介入　**中国四国心理学会論文集**, **33**, 32.

加用文男　1981　幼児のけんかの心理学的分析　現代と保育, **7**, 176-189.

Laursen, B., Finkelstein, B. D., & Betts, N. T. 2000 A developmental meta-analysis of peer conflict resolution. *Developmental Review*, **21**, 423-449.

O'connell, P., & Pepler, D., & Craig, W. 1999 Peer involvement in bullying: insights and challenges for intervention. *Journal of Adolescence*, **22**, 437-452.

Schwartz, D., Dodge, K. A. & Coie, J. D. 1993 The emergence of chronic peer victimization of boy's play groups. *Child Develoment*, **64**, 1755-1772.

Shantz, C. U. 1987 Conflict between children. *Child development*, **58**, 283-305.

Shantz, C. U., & Shantz, D. W. 1985 *Conflict between children: Social-cognitive and sociometric correlates.* In M. W. Berkowitz (Ed.)., *Peer conflict and psychological growth: New directions for child development* (pp. 3-21). San Francisco: Jossey-Bass.

Thone, B. 1986 Girls and boys together; but mostly apart: Gender arrangements in elementary schools. In W. W. Hartup & Z. Rubin (Eds.), *Relationships and development* (pp. 167-184). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

上野留美子　1974　乳幼児期における自己領域の確立と対人関係の発達（その一）－「○○チャンノ・・・」を中心に－　**乳幼児保育研究**, **2**, 30-53.

渡部玲二郎 1993 児童における対人交渉の発達－社会的情報処理と対人交渉の関連性－　**教育心理学研究**, **41**, 452-461.

渡辺弥生 1989 児童期における公正観の発達と権威概念の発達との関連について　**教育心理学研究**, **37**, 163-171.

山本登志哉　1986　乳幼児の所有形態とその変化－観察結果の分類・記述の試み－　**日本教育心理学会第28回発表論文集**, 86-87.

（指導教官：山崎晃）